

アフリカ英語圏9カ国から理数科の先生来日

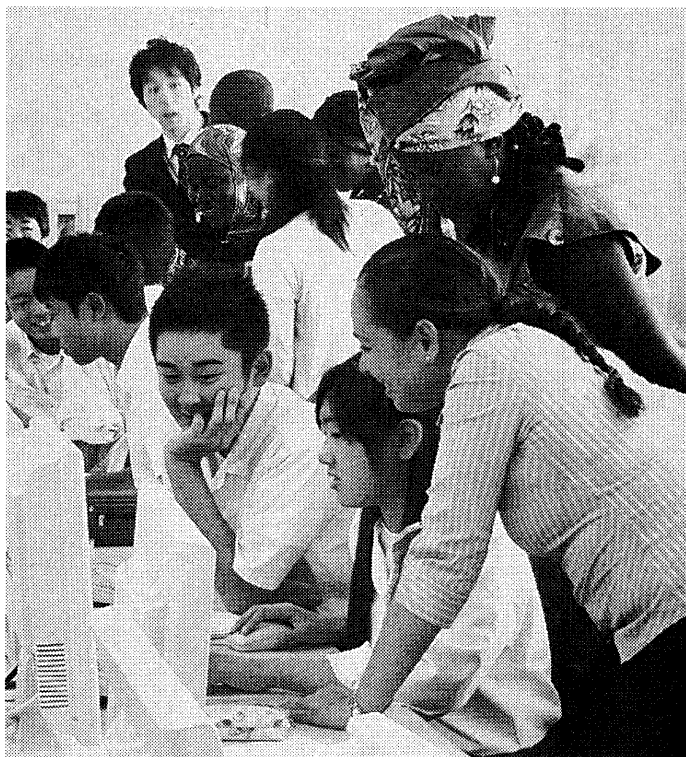
秋田の中学校で模擬授業

この事業は昭和五十八年、当時の中曽根康弘首相が提唱し、外務省が策定した青年招聘事業「二十一世紀のための友情計画」の一環。五十九年から国際協力機構(JICA)が主体となつて行い、平成十七年度までに約百二十の国と地域から約二万五千人を招聘し、各国の人材育成と相互理解に貢献している。

今年度はアジア、大洋州、アフリカ、中南米、中近東など百二十九国・一地域から、千六百八十人を招聘する。このうち、九カ国二十四人のアフリカ(英語圏)中等理科科教員グループは先月

パソコンで金星の動きを見たり、電流と回路の実験に参加—アフリカ英語圏九カ国の理数科教員二十四人が今月四日から九日間、秋田県を訪れ、模擬授業などを行った。政府開発援助(ODA)の一環として、わが国が発展途上国の青年を招聘(しょうへい)する事業の一つに参加した。学校や自然科学施設の訪問、専門分野の研修、ホームステイ受け入れ家庭などを通じ、教育面だけでなく人々との交流も深めた。

三十日に来日し、九月四日、秋田市立岩見三内中学校(原田滋校長、生徒数



ふるさとホストライオン

金星の動きをパソコンで学ぶ授業に参加する教師達

「チョコレートを作るのを見るために行ってみたい人!」「ダイヤモンドが好きなのはシエラ・レオネにいらっしやい」

タンザニア教育省の物などの呼び掛けに、生徒 理数学科教師ルシアさん

見て「生徒が楽しんでいるのが印象的だった。学習にとっても積極的に参加している。先生も道具の使い方工夫を凝らしており、全体的に学習のレベルが高い」と、その印象を語る。

タンザニア教育省の物

生徒が積極的に参加し
楽しんでる姿印象的

お辞儀とともいい文化
自分の国でも行いたい

六十四人)を訪問した一行は、パソコンを使った理科と数学の授業や、理科室での「回路を流れる電流」の授業に参加。金星への太陽光の当たり方や立体の左右前後から見た図などを生徒と一緒に解いていた。

その後、三クラスに分

かれて各国の地理や言葉、自然、民族衣装などを紹介。

は両手を上げて元氣よくハイッと返事。セインエルの教師は「私たちの国には百十五の島があり、日本の漁船も来て漁業をしています。授業はみんな英語です」などと説明していた。

セインエル教育省の数学科教師アレンさん(33)

は、数学と理科の授業を

シエラ・レオネの教師は「会った人におじぎをするのは、他人を敬うこととてもいい文化。自分の国や家族でも行いたい。日本人は一生懸命働いて勤勉なので、今の日本があると思います」と感想を語った。

一行は、ほかにウガンダ、エジプト、エチオピア、ガーナ、ケニア、ナイジェリアから参加。県内の受け入れはJ A I C Aの委託を受け、ボランティアグループ「秋田県国際交流友の会(佐藤英明会長)が担当し、学校や施設訪問の手はずを整えた。

一行は、県立男鹿水族館G A O(ガオ)や秋田市自然科学学習館の訪問、秋田大学の専門研修、ホームステイ受け入れ家庭などと交流を深め、十二日からは東京や千葉の学校を訪問するなどし、二十一日帰国する。

(秋田支局・伊藤志郎)